

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12341

研究課題名（和文）19世紀後半の精神医学、犯罪学、文学 エクトール・マロの社会派小説から

研究課題名（英文）Psychiatry, criminology, literature in the late 19th century. Hector Malot's social novels

研究代表者

梅澤 礼 (Umezawa, Aya)

富山大学・学術研究部人文科学系・准教授

研究者番号：50748978

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、児童文学作家として知られるエクトール・マロの社会派小説に注目したものである。『義弟』と『シャルロットの夫』は、強制入院制度を批判すべくマロが発表した小説である。そこでは理性を体現する光と狂気を表す闇が交錯し、「明晰なる狂気」と呼ばれる病が文学的に描かれている。またマロは実在の事件から着想した『クロード医師』『良心』『正義』のほか、『ジュリエットの結婚』と『義母』で犯罪を取り上げている。そこでは犯罪者は闇や未開の比喻で描かれ、近代司法の光に容赦なく追い詰められている。二極化した世界での少数派の苦しみに独自の光を当てられていること、それがマロの社会派小説の特徴であることを本研究は示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、『家なき子』や『ペリーヌ物語』といった児童文学で知られるエクトール・マロの、社会派作家としての側面に光を当てたものである。マロの社会派小説にふれた歴史研究はすでにフランスに存在するが、本格的な文学的分析をこころみしたのは本研究が世界的にも初めてである。マロの作風だけでなく、19世紀後半の文学と精神医学の知られざる関係をも明らかにした本研究の成果は、同時代に精神病を描いたゾラやモーパッサンなどの研究にも活かされるだろう。研究期間中にはスイスの研究者を招いて国際ワークショップも行ない、両国の学術交流に貢献した。また研究成果は論文以外に雑誌連載の形で掲載され、広く一般に公開された。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the social novels of Hector Malot, a highly regarded 19th century French author of children's literature. In "Un Beau-Frere" and "Le Mari de Charlotte", Malot criticized the compulsory hospitalization system of the time by highlighting cases of "clear madness" via metaphors of light (reason) and shade (folly). Malot used a similar style in his crime-focused novels, where he compared criminals to barbarians living in darkness who were mercilessly tormented by the light of modern justice. Some of these books were inspired by actual cases, such as "Dr. Claude", "Conscience" and "Justice", "Le Mariage de Juliette", and "Une Belle-Mere". This study explores Malot's use of metaphor as a means for highlighting the plight of minorities suffering from injustice in a polarized world.

研究分野：フランス文学

キーワード：マロ 精神病 犯罪 社会

1. 研究開始当初の背景

歴史家オード・フォーヴェルは論文「狂人の声—エクトール・マロと『精神病院小説』」(2008)で、『家なき子』の作者として知られるエクトール・マロが精神科医たちと対立していたことを紹介した。そのきっかけとなったのが『義弟』(1869)という小説であり、その後もマロは『シャルロットの夫』(1874)や『母』(1890)でも、精神医学の抱える問題を告発しつづけたという。ただしマロは、精神医学にかぎらず、犯罪のテーマにもひかれていたようであった。

日本でもフランスでも、児童文学の作家とみなされているマロが社会派の小説を手がけていたことは、ほとんど知られていなかった。たしかにフォーヴェルの論文以降、マロ友の会の『ペリーヌ紀要』における『義弟』特集(2011)のように、いくつかの研究がこの作品に注目は始めていた。またイヴァン・キリロウは「エクトール・マロの小説における犯罪者の遺伝と先祖返り」(2016)において、作家の犯罪者描写を取り上げていた。しかしいずれも、作者と精神医学の対立であるとか、作品と犯罪学理論の共通点といった外枠を追うものであり、数少ない先行研究は作品の解説にとどまっていた。

2. 研究の目的

児童文学作家として知られるマロは、これらのいわば社会派の小説のなかで、狂気や犯罪をどのように描いていたのか。19世紀後半のフランスにおいて医学、犯罪、文学はどのように関わりあっていたのか。本研究は、子ども向けの作家としてこれまで文学研究の対象からは外れがちであったマロが、近代の学術理論をどのように写し取り、その先にどのように独自の見解を築き上げ、最終的に作品世界を構築したのかという、マロの社会派作品の解釈を目的とした。

なお本研究では、同時代の学術書に現れた精神病患者や犯罪者をめぐる言説とマロによる描写が比較されることになる。こうして科学と小説、歴史資料と文学資料の垣根を超えた言説の分析が行われることにより、これまで研究してきた、19世紀後半の医学や犯罪学と文学の関係がよりはっきりと浮かび上がってくることも見込まれた。

3. 研究の方法

2018年度の研究は、マロの『義弟』、『シャルロットの夫』、『母』の3作品において、写実主義の時代にありながらも精神病が作家の想像力によって描かれていたこと、そしてこのことが当時の文学と精神医学の一般的な関係とは反するものであったことを目的とした。所属機関の夏休み中には渡仏し、国立図書館で当時の精神医学論文を閲覧し、精神病患者に関する学術的言説を収集した。10月には日本フランス語フランス文学会秋季大会にて、マロの同郷の後輩であり狂気を描いた作家モーパッサンの専門家を招き、幻想的な文学に関するワークショップを行なった。12月には、マロからしばしばインスピレーションを受けていた作家ゾラによる専門資料の使い方について、信州大学主催の国際シンポジウム「民衆文化と文学」で発表した。3月には、マロと逆の立場から、つまり精神科医でありながら小説を描いたド・グレーフの初期小説について、ルーヴァン大学図書館にて調査した。そしてこれまでの研究結果を、九州大学主催のシンポジウム「現代における揺れ動く身体と言説」および単著『囚人と狂気—19世紀フランスの監獄、文学、社会』(2019)で発表した。そのほか、ローザンヌ大学医学・保健衛生史研究所のオード・フォーヴェルとコンタクトを取り、翌年度の日本フランス語フランス文学会での、マロの社会派小説をめぐるワークショップへの参加を依頼し、快諾された。

2019年度の研究は、マロの『クロード医師』、『良心』、『正義』、『共犯者』における犯罪者描写の特徴を分析し、これが同時代の犯罪学理論とはむしろ逆行していたことを示すことを目的としていた。4月から8月にかけては、犯罪的登場人物を描くにあたりマロが上の4作品で見せている文学的技法を分析した。9月にはフランスの国立図書館で、おもに19世紀後半の考古学の状況を中心に調査した。その結果、マロが同時代の学者ルイ・フィギエによる『原始人』という専門書を参考に作品を執筆していた可能性が明らかになった。この発見は、まず10月に近畿大学(大阪)で行なった国際ワークショップの場で発表した。国際ワークショップ「Hector Malot et ses romans sociaux」では、ローザンヌ大学のオード・フォーヴェル准教授を招聘し、精神病患者とマロ(フォーヴェル)、児童とマロ(他研究者)、そして犯罪者とマロ(梅澤)についてそれぞれフランス語で研究成果を発表し、梅澤が司会となって討論をした。その後、2月にかけて、発表内容をフランス語論文にまとめあげた。

こうして本課題(2018-2019年度)の研究は、マロの描く女性と犯罪について、19世紀文学と女性の表象を専門とする研究者の最終講義(2020年3月、大阪)に出席し意見交換をすることで終了する予定であった。ところがコロナウイルスの感染拡大により、最終講義が2020年7月に延期されるということになり、その出張と意見交換のために本研究は延長を申請することとなった。その2020年7月、当該講義は最終的に中止となり、予定されていた出張は取りやめとなった。そのかわり、マロの別の作品について分析を進め、2020年12月に日本フランス語フランス文学会中部支部大会で研究発表を行なった。

2021年度は、2020年度春に実施できなかった国外図書館での資料収集および学会参加を予定していたが、コロナウイルスの感染が終息しなかったことにより、資料についてはILLで取り

寄せるにとどめ、学会はオンラインで参加せざるをえなかった。とはいえ、新たな研究課題である「戦、金、愛—エクトール・マロの大人向け作品における近代社会とその犠牲者たちの描写—」が2021年4月に採択され、本研究に残された課題は引き継がれることとなった。

4. 研究成果

【論文（フランス語）】

- ・ Aya UMEZAWA, « La description littéraire de l'aliénation mentale chez Hector Malot », *Étude de langue et littérature françaises*, 118, 2018, p. 3-16.
- ・ Aya UMEZAWA, « La lumière de la civilisation et l'obscurité primitive. *Le Docteur Claude, Conscience et Justice* d'Hector Malot », *Stella*, 38, 2019, p. 105-115.
- ・ Aya UMEZAWA, « Le monde bipolaire chez Hector Malot. Autour du *Mariage de Juliette et Une Belle-mère* (1874) », *Bulletin annuel de la société de langue et littérature françaises du Chubu*, 45, SJLLF Chubu, Nagoya, 2022, p. 55-65.

【発表（国際学会、フランス語）】

- ・ Aya UMEZAWA, « La culture du crime et la littérature. "Les chauffeurs" dans *La Terre* de Zola », *La littérature et la culture populaire au XIXe siècle*, Université de Shinshu, 2018. (招待)
- ・ Aya UMEZAWA, « La lumière de la civilisation et l'obscurité primitive. *Le Docteur Claude, Conscience et Justice* d'Hector Malot », Workshop organisé dans le cadre du colloque SJLLF, « Hector Malot et ses romans sociaux », Université Kindai, 2019.

【発表（日本語）】

- ・ 梅澤礼「悪魔の見えざる手—『煉獄の魂』再考—」, 日本フランス語フランス文学会ワークショップ「見えるもの、見えないもの—19世紀幻想文学を再考する—」, 新潟大学、2018年。
- ・ 梅澤礼「犯罪者の身体—19世紀フランスの犯罪科学と文学—」, 「現代における揺れ動く身体と言語」, 九州大学、2019年。(招待)
- ・ 梅澤礼「エクトール・マロの二極化した世界—『ジュリエットの結婚』『義母』(1874)を中心に—」, 日本フランス語フランス文学会中部支部大会、2020年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Aya Umezawa	4. 巻 38
2. 論文標題 La lumiere de la civilisation et l'obscurite primitive. "Le Docteur Claude", "Conscience" et "Justice" d'Hector Malot	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Stella	6. 最初と最後の頁 105, 115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Aya UMEZAWA	4. 巻 118
2. 論文標題 La description litteraire de l'alienation mentale chez Hector Malot	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Etude de langue et litterature francaises	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/e11f.112.0_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 エクトール・マロの二極化した世界 『ジュリエットの結婚』『義母』（1874）を中心に
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会中部支部大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Aya Umezawa
2. 発表標題 La lumiere de la civilisation et l'obscurite primitive. "Le Docteur Claude", "Conscience" et "Justice" d'Hector Malot
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ Hector Malot et ses romans sociaux（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 こわいドン・ファン 幻想文学作家としてのメリメ
3. 学会等名 ヨーロッパこわいはなし
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 Les prisonniers sentis. Usage de la litterature des prisonniers dans une recherche historico-litteraire
3. 学会等名 Societe des etudes romantiques et dix-neuviemistes (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 悪魔の見えざる手 『煉獄の魂』再考
3. 学会等名 見えるもの、見えないもの 19世紀幻想文学を再考する
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 La culture du crime et la litterature. Les chauffeurs dans La Terre de Zola
3. 学会等名 La litterature et la culture populaire au XIXe siecle (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 犯罪者の身体 19世紀フランスの犯罪科学と文学
3. 学会等名 現代における揺れ動く身体と言語（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 梅澤礼	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 318
3. 書名 囚人と狂気 19世紀フランスの監獄、文学、社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

La SERD https://serd.hypotheses.org/3625
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Hector Malot et ses romans sociaux	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 精神医学と人文学	開催年 2019年～2019年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------